

『紅樓夢』回目の翻訳から見た日本における
『紅樓夢』の受容
— 『國譯紅樓夢』を中心に—

黄 彩霞 寺村政男

The Acceptance of A Dream Of Red Chamber in
Japan from the Translation of the Chapter Title

Caixia HUANG, Masao TERAMURA

要旨

日本是世界上除中国之外对《红楼梦》研究最多的国家，对《红楼梦》的翻译更是其他国家无法比拟的。大正9年-11年日本最初的全译本《国译红楼梦》问世，后又出现了松枝茂夫译本、伊藤漱平译本和饭塚朗译本。因《红楼梦》亦被称为中国清朝社会的大百科全书，是清朝社会文化的优秀代表，因此《红楼梦》的翻译本身即是一种中日文化交流。反过来，我们通过对《红楼梦》翻译的研究，也可以得知《红楼梦》所代表的中国文化在被翻译当时是如何被日本人解读与理解的。本稿此次主要将目光集中在《红楼梦》的回目翻译，以《国译红楼梦》为中心，对包括2种改译在内的6种《红楼梦》全译本的前80回回目进行比较，试图了解《红楼梦》的回目在被翻译当时是如何被解读的，以及《国译红楼梦》作为日本最初的全译本具有怎样的特殊存在价值。研究结果发现，大正时期的《国译红楼梦》已经显示了很高的白话词汇理解水平，并对其他全译本产生了很大的影响，尤其对松枝茂夫初译本的影响最大。

キーワード：紅樓夢 回目 全訳本 國譯紅樓夢 受容

0. はじめに

『紅樓夢』は中国四大名著の一つであり、日本では中国「五大小説」の中に入っている。この『紅樓夢』には80回本と120回本がある。80回本は写本であり、現存する写本は11種類あるが、中には端本が多い。脂硯齋の評語がたくさんついていることから、「脂批本」、又は「脂評本」とも言われる。120回本は基本的に排印本で、乾隆56年（1791年）に萃文書屋から木活字排印された『新鐫全部繡像紅樓夢』（通称「程甲本」）が最初の排印本である。翌年1791年の春に「程甲本」の改訂版（通称「程乙本」）が刊行された。その後も「程甲本」の翻刻本が北京や南方の書店で続々と出されている。『紅樓夢』の作者に関しては、前80回は曹雪芹⁽¹⁾の作であり、後40回については諸説があるが、高鶚⁽²⁾の続作だとする見方が広く受け入れられている。

『紅樓夢』は18世紀中葉に世に問われて以来、中国はもとより、外国においても多数の「紅迷」と言われる『紅樓夢』ファンに愛読され、「紅学」と言われる紅樓夢研究も絶えず行われてきた。幕末から現代までの日本における『紅樓夢』の流行については、伊藤漱平（1986）⁽³⁾で既に解明されている通り、『紅樓夢』は寛政5年（1793年）に日本に渡来し、当初は唐通事の高級教材として用いられ、明治時代には東京外国語学校の北京官話の教科書としても使われた。そして、曲亭馬琴（1767-1848）、依田学海（1833-1909）、森槐南（1863-1911）、島崎藤村（1872-1943）、北村透谷（1868-1894）、笹川臨風（1870-1949）、宮崎来城（1871-1933）、幸田露伴（1867-1947）など、数多くの日本の文学者に愛読され、大きな影響をもたらした。

中国を除くと、最も紅学が進んでいる国は日本である⁽⁴⁾。日本紅学の発展は『紅樓夢』翻訳の盛況に負うところが大きいと思われる。明治時代からしばしば『紅樓夢』の抄訳が行われたが、『紅樓夢』の全訳本は大正時代になってようやく出現し、今までに四種の全訳本（改訂版を含まない）が出版された。『紅樓夢』翻訳の盛況に引きかえ、その翻訳に対する研究は遅れていると言える。中国における日本紅学に対する研究は、その概観の紹介にとどまり、本格的研究と言えるものはまだない⁽⁵⁾。日本においては、『紅樓夢』の

成立・文学性に関する研究が多く、『紅樓夢』についての研究は概ね中国語研究の立場や中国文学の立場から行われている。『紅樓夢』の翻訳について研究しているのは森中美樹（2007）⁽⁶⁾と森中美樹（2008）⁽⁷⁾などが挙げられる。『紅樓夢』は中国清朝社会の百科事典である⁽⁸⁾と言われる。用いられる言葉は清朝当時の社会文化・中国の伝統文化と緊密に繋がっているため、現代の一般の中国人の読者にも簡単にわかるわけではない。そこで、紅樓夢注が所々施され、様々な紅樓夢辞典が出現するに至った。『紅樓夢』の翻訳の過程は即ち日本語と中国語、あるいは日本文化と中国文化の接触する過程でもある。『紅樓夢』の翻訳を通して、現代中国人にも難解な『紅樓夢』は翻訳された当時の日本人に如何に解説、受容されたかがある程度窺えると思われる。

そこで、本稿では『紅樓夢』回目の翻訳に集中し、日本初の全訳本である『國譯紅樓夢』を中心に、『紅樓夢』受容の一端を明らかにする。

1. 『紅樓夢』の全訳本及びその使用底本

今までの日本における『紅樓夢』の全訳本は、訳者によって分けると、幸田露伴・平岡龍城⁽⁹⁾共訳の『國譯紅樓夢』、松枝茂夫の訳した『紅樓夢』、伊藤漱平の訳した『紅樓夢』（以下、伊藤訳と略）と飯塚朗の訳した『紅樓夢』（以下、飯塚訳と略）の四種がある。

①『國譯紅樓夢』（80回本）

日本初の『紅樓夢』全訳は、幸田露伴と平岡龍城共訳の『國譯紅樓夢』（以下『國譯』と略す）である。全三巻、大正9年（1920）～大正11年（1922）にかけて、国民文庫刊行会によって『國譯漢文大成』の中の一書として出版された。訳者については、森中美樹（2007）によれば、露伴が露伴註と「紅樓夢解題」を書いただけで、翻訳したのは主に平岡龍城の仕事であるという。底本は『國初鈔本原本紅樓夢』であり、露伴に「解題」で「原本紅樓夢」と称されている。

『國初鈔本原本紅樓夢』は脂批系統の80回本であり、民国元年（1912年）

に上海有正書局の主人狄葆賢が、戚蓼生（乾隆34年進士）の序文がある「戚本」を原文に、『國初鈔本原本紅樓夢』と題して石印出版したものである。これは「有正本」又は「有正戚序本」とも呼ばれる。有正本は『紅樓夢』80回本の初めての排印本であり、中には脂硯齋（曹雪芹と極めて親しい間柄の人で、『紅樓夢』の完成を支援したと見られる）の批語が多く、他の脂評本にないものも多く含まれているため、研究上の意味が大きい。しかし、石印される際に、原本にある批語の元署名や日付が削られたり、文字が修正されたりして、いろいろ手を加えられているのが残念なこととされている。それにもかかわらず、露伴が「解題」で書いた通り、「之を俗本に比するに字句間々異同あり、而して多く其の佳なるを見る」。これも國譯本の底本にされた理由の一つになるだろう。

②松枝茂夫訳本（120回本）

松枝茂夫訳本（以下、松枝訳と略す）は初訳本と改訳本がある。

初訳は昭和15年（1940）～昭和26年（1951）にかけて、岩波書店によって「岩波文庫」の一種として刊行された松枝茂夫訳の『紅樓夢』120回完訳本（以下「松枝初訳」と称す）であり、全14冊ある。前80回は『國譯』と同じように、「有正本」を用い、後40回は「程乙本」を基に訳している。「程乙本」は、「程甲本」（乾隆56年（1791）に程偉元により続作を合わせられ、萃文書屋から初めて木活字印刷された120回本）の改訂版であり、乾隆57年（1792年）春に萃文書屋から木活字で刊行された120回完本である。

改訳本は1972～1985年にかけて岩波書店から出版されたもので、一冊に10回分収められ、全12冊ある。（以下「松枝改訳」と略）底本には主として1958年に人民文学出版社より出版された兪平伯校訂『紅樓夢八十回校本』（以下「兪本」と略す）に拠ったが、「わが意をもって多少改めたところもある」と「解説」で断りが書かれている。

③伊藤漱平訳本（120回本）

伊藤訳は全部で4シリーズある。昭和33年（1958）～35年（1960）にかけて、「中国古典文学全集」の一種として、平凡社より刊行された伊藤漱平初訳本

（以下「伊藤初訳」と略）は、120回完訳本で、上・中・下三巻ある。その底本については、伊藤初訳の「解説」では「この翻訳の底本には兪平伯氏のゆきとどいた校訂になる「紅樓夢八十回校本」を用いた。実は、上巻に収めた分のおよそ半分ほどは、兪氏とはほぼ同様な方法で「戚本」大字本を底本に「庚辰本」の影印本を主要な校本として訳業を進めていたのであるが、本年春、「校本」が刊行を見たので、これを入手するに及んで、これを底本として抛ることとし、既訳の分も改めてできるだけ「校本」に従うよう手を入れ直した」と述べられた。一方、伊藤漱平氏「日本における『紅樓夢』の流行—幕府から現代までの書誌的素描」（『中国文学の比較文学的研究』所収、古田敬一編、汲古書院1986）という論文の中では、「前80回は庚辰本の影印本を底本に用い、後40回は兪氏の『八十回校本』付載の程甲本に拠った」と述べられている。筆者が伊藤初訳と兪平伯校訂の『紅樓夢八十回校本』（以下「兪本」と称す）と比較してみたところ、初訳の底本はその「解説」で述べられたように兪本であると判明した。

後に、伊藤初訳は3度も改訳が行われた。まず、1969年から1970年にかけて改訳され、「中国古典文学大系」の一種として平凡社より出版された。次に1973年に平凡社奇書シリーズの一書として出版される際にまた改訳が行われ、そして、1996年～1997年に三度目の改訳が行われ、平凡社ライブラリーの一書として出版された。これら3回の改訳本は基本的に兪本（1963年改訂版）を底本に使用している。

④飯塚朗訳本（120回本）

1980年に集英社より「世界文学全集」の一種として出版され、120回全訳本で、全三巻。70年代の「人民文学出版社」（以下「人社本」と略す）を底本にし、また兪本その他を参考にして原書を改めた箇所もあると「解説」で書かれている。70年代の人社本は即ち1974年10月に人民文学出版社より出版された『紅樓夢』（程乙本を底本に、程甲本及びその他の120回本参考）である。

以上述べてきたように日本における『紅樓夢』の全訳は訳者によって分

けると4種あるが、本稿では松枝改訳と中国古典文学大系の一冊としての伊藤改訳（1969～1970）も考察対象に入れ、全部6種類考察することになる。前80回の底本については、『國譯』と松枝初訳では有正戚序本、松枝改訳と伊藤訳では兪本、飯塚訳では人社本が用いられている。本稿では『國譯紅樓夢』の底本である有正戚序本を基準に見出し語を抽出した。

2. 『紅樓夢』回目の翻訳について

『紅樓夢』諸訳本の回目を比較してみると、よく似ている回目も多いが、著しく異なっている回目も少なくないことが分かる。では、なぜ相違が生じたのか。『紅樓夢』の回目がどのように解説されて日本語に翻訳されたのか。本節では『國譯』を中心に『紅樓夢』回目の翻訳について詳しく見てみたい。

（1）底本の違いによる回目上の相違

底本の版本によって、『紅樓夢』の回目に若干異同がある。では、『國譯』と違う底本を使用した全訳本の回目は『國譯』と比べてどんな異同があるのか。『國譯』と同底本を用いた松枝初訳の回目は『國譯』と同じなのか。それを解明するために、『國譯』とその他の全訳本を比較した。

①全訳本それぞれの底本の回目の相違

前述したように、『國譯』と同様に有正本を底本に用いたのは松枝初訳のみであり、松枝改訳・伊藤訳は兪本を、飯塚訳は人社本を底本に用いている。表1を見ればわかるように、第5・7・8・17・18・49・65・67・80回の回目においては、「兪本」と「人社本」が「有正本」と大きく異なっている。そのため、「兪本」を用いた伊藤訳と「人社本」を用いた飯塚訳が「有正本」を用いた『國譯』と著しく異なっているのは当然のことである。しかし、以上の9回分の回目と異なり、第9回の回目では、「兪本」と「有正本」が同じで「人社本」だけが異なっている。そのため、伊藤訳と『國譯』の第9回の回目は同じになっている。

表1－全訳本それぞれの底本の回目の相違

第5回	有正本	靈石迷性難解仙機 警幻多情秘垂淫訓	第7回	有正本	尤氏女獨請王熙鳳 賈寶玉初會秦鯨卿
	兪本	遊幻境指迷十二釵 飲仙醪曲演紅樓夢		兪本	送宮花賈璉戲熙鳳 宴寧府寶玉會秦鐘
	人社本	賈寶玉神遊太虛境 警幻仙曲演紅樓夢		人社本	同兪本
第8回	有正本	攔酒興李奶母討懣 擲茶杯賈公子生噴	第9回	有正本	戀風流情友入家塾 起嫌疑頑童鬧學堂
	兪本	比通靈金鴛微露意 探寶釵黛玉半含酸		兪本	同有正本
	人社本	賈寶玉奇緣識金鎖 薛寶釵巧合認通靈		人社本	訓劣子李貴承申飭 噴頑童茗煙鬧書房
第17回	有正本	大觀園試才題對額 怡紅院迷路探曲折	第18回	有正本	慶元宵賈元春歸省 助情人林黛玉傳詩
	兪本	大觀園試才題對額 榮國府歸省慶元宵		兪本	第17回と合回になっている
	人社本	同兪本		人社本	皇恩重元妃省父母 天倫樂寶玉呈才藻
第49回	有正本	白雪紅梅園林集景 割腥啖膾閨閣野趣	第65回	有正本	膏粱子懼內偷娶妾 淫奔女改行自擇夫
	兪本	琉璃世界白雪紅梅 脂粉香娃割腥啖膾		兪本	賈二舍偷娶尤二姨 尤三姐思嫁柳二郎
	人社本	同兪本		人社本	同兪本
第67回	有正本	餽土物顰卿思故里 訊家童鳳姐蓄陰謀	第80回	有正本	懦弱迎春腸迴九曲 狡怯香菱病入膏肓
	兪本	見土儀顰卿思故里 聞秘事鳳姐訊家童		兪本	美香菱屈受貧夫棒 王道士胡謔妬婦方
	人社本	同兪本		人社本	同兪本

しかし、松枝改訳も「兪本」を底本に用いているが、表1で示している10回分の内、『國譯』と似ている回目もある。即第17・18・65・67回である。その理由は、その4回分が有正本によって翻訳されたからである。内、第18

回の訳註では、「原作者の生存中は、第十七・十八の両回は合回のままらしく、二回に分回されたのは死後の事に属する。(中略) テキストによって分け方が多少ちがうが、今は戚蓼生本⁽¹⁰⁾に拠って二回に分けた」と述べられ、そして第67回の訳註では、「この回は、版本の上からいって特に問題の多い回である。戚本は曹雪芹の初稿に近く、程本は改稿本に拠ったものかと思われる。(中略) この訳書の本文は戚本に拠って訳し、短行で程本のすぐれた箇所はことわりを添えて本文にくり入れたほか、(中略) 程乙本に拠る訳文を巻末に付録することにした」と書かれていることから、この3回分がなぜ「戚本」に拠って訳されたかが分かる。つまり、有正戚序本が曹雪芹の初稿に近いと思われたからである。ところが、第65回については、別の版本に拠って訳されたかどうかはどこにも書かれておらず、「膏梁の子 妻を恐れて秘かに妾を娶り 淫奔の女 行いを改めて自ら夫を択ぶ」という第65回回目の訳文からは有正本第65回回目「膏梁子懼内偷娶妾 淫奔女改行自擇夫」の翻訳であると判明できる。

②松枝初訳における『國譯紅樓夢』と著しく異なっている回目

松枝初訳は『國譯』と同じ有正本を用いているにもかかわらず、『國譯』と著しく異なっている回目も存在している。それは、下記の表2で示しているように、第5・8・25回である。

表2—松枝初訳における『國譯』と著しく異なっている回目

第5回	國譯	訳文	靈石迷性 <small>れいせきめいせいせん き</small> 仙機 <small>と がた</small> を解き難く、警幻多情 <small>けいげんたじやうげんくん ひすむ</small> 玄訓を秘垂す
		原文	靈石迷性難解仙機 警幻多情秘垂淫訓
	松枝初訳	訳文	買寶玉、夢に太虚幻境に遊び 警幻仙姑の紅樓夢の曲をきく
		原文	買寶玉神遊太虚境 警幻仙曲演紅樓夢
第8回	國譯	訳文	酒興 <small>しゆきやう さへぎ</small> を攔つて李奶奶 <small>りばあ</small> を <small>や</small> は <small>ら</small> は <small>れ</small> る <small>こ</small> と <small>し</small> 憊 <small>ちやはい</small> を討、茶杯 <small>なげうつ</small> を擲つて買公子 <small>かこうしいかり</small> を <small>しやう</small> 生 <small>ず</small>
		原文	攔酒興李奶奶討憊 擲茶杯買公子生噴
	松枝初訳	訳文	買寶玉、奇しき縁にて金鎖を識り 薛寶釵、ゆくりなくも通靈を認む
		原文	買寶玉奇縁識金鎖 薛寶釵巧合認通靈

第 25 回	國譯	訳文	魔法を魔 <small>ま</small> られ <small>かけ</small> 姉 <small>して</small> 弟 <small>い</small> 五 <small>き</small> 鬼 <small>あ</small> に逢 <small>こ</small> ひ、紅樓夢通靈 <small>むつれいさうしん</small> 雙 <small>あ</small> 眞 <small>あ</small> に遇 <small>あ</small> ふ
		原文	魔法姉弟逢五鬼 紅樓夢通靈遇雙眞
	松枝 初訳	訳文	魔法にかたり姉弟、五鬼に逢ひ 通靈玉、蔽を蒙りて雙眞に遇ふ
		原文	魔法姉弟逢五鬼 通靈玉蒙蔽遇雙眞

『國譯』と同様の底本が用いられたにもかかわらず、なぜ第5・8・25回の回目が『國譯』と大きく異なっているのだろうか。この点についてはどこにも説明が書かれていないが、前80回が『國譯』と同じく有正本を底本に訳され、後40回が「程乙本」によって訳されたと松枝初訳の「解説」で書かれているため、上述の3回分の訳文を程乙本と照らし合わせてみることにした。その結果、第5・8回の回目は程乙本とぴったり一致していることが分かった。したがって、第5・8回の回目は程乙本によって翻訳された可能性が高いと言えるだろう。

面白いことに、第25回の前句「魔法にかたり姉弟、五鬼に逢ひ」は有正本第25回「魔法姉弟逢五鬼」の訳であるが、後句の「通靈玉、蔽を蒙りて雙眞に遇ふ」は程乙本第25回「通靈玉蒙蔽遇雙眞」の訳に当たる。それについては訳注で何の説明も書かれていないため、その本当の理由は分からないが、恐らく松枝は先に有正本に拠って翻訳し終わった後、また程乙本によって改めたとも考えられる。前句については、有正本の「姉弟」が程乙本では「叔嫂」になっているが、なぜそこだけが改められなかったかというと、それは解説の部分にも書かれているとおり、訳者の意をもってわざとそのまま改めなかったという可能性も考えられる。

このように、伊藤訳と飯塚訳の回目が『國譯』と著しく異なっているのは単に底本の違いが原因となっている。それに対して、松枝訳の回目に関しては、初訳にしても改訳にしても、主となる底本以外に、他の版本に拠って訳された回もあり、訳者の意で改められた回もあるため、『國譯』との相違が特に目立っている。

では、『國譯』はどうか。次節では『國譯』が底本をそのまま訳したもの

かどうかを見てみる。

(2) 『國譯紅樓夢』の回目が底本と相違している箇所

『國譯』にも底本と相違のある箇所が存在している。主に以下のような3種類にまとめられる。

①本の本文にある回目を基準に統一された箇所

有正本第3・10・17・38・49回の本文にある回目が總目録の回目と不一致の箇所がある。それについては、『國譯』では、底本の本文にある回目を基準に統一されている。詳しくは表3で示した通りである。

表3－底本の本文にある回目によって統一された箇所

回数	底本の総目録	底本の本文の回目	『國譯』の翻訳
第3回	接外甥買母惜孤女	接外孫買母惜孤女	外孫 <small>くわいそん</small> に接 <small>せつ</small> して、買母 <small>かぼ</small> 孤女 <small>こちよ</small> を惜 <small>いと</small> しむ
第10回	張太醫論病細窮源	張太醫論病細窮原	張太醫 <small>ちやうたいい</small> 、病 <small>やまひ</small> を論 <small>ろん</small> じて細 <small>こまか</small> に原 <small>もと</small> を窮 <small>きは</small> む
第17回	怡紅院迷路探曲折	怡紅院迷路探深幽	怡紅院 <small>いこうゐん</small> に路 <small>みち</small> を迷 <small>まよ</small> ひ深幽 <small>しんいう</small> を探 <small>さぐ</small> る
第38回	薛蘅蕪諷和螃蟹吟	薛蘅蕪諷和螃蟹咏	薛蘅蕪 <small>せつかう</small> ふかに <small>ぶかに</small> 螃蟹 <small>かに</small> の咏 <small>し</small> と和 <small>よ</small> む
第49回	白雪紅梅園林集景	白雪紅梅園林佳景	白雪紅梅 <small>はくせつこうばい</small> 、園林 <small>ゑんりん</small> の佳景 <small>かけい</small>

第3回：底本の総目録では「接外甥買母惜孤女」であるが、本文の回目では「接外孫買母惜孤女」となっている。

第10回：底本の総目録における「張太醫論病細窮源」の「源」は本文の回目で「原」となっている。

第17回：底本の総目録にある「怡紅院迷路探曲折」の「曲折」は、本文の回目で「深幽」になっている。

第38回：底本の総目録の「薛蘅蕪諷和螃蟹吟」の「吟」は本文の回目で「咏」になっている。

第49回：底本の総目録における「白雪紅梅園林集景」は、本文の回目では「白雪紅梅園林佳景」となっている。

有正本は戚張本⁽¹¹⁾によって石印されたものである。石印される際に、戚張本の字が貼り付けられたりしたことがある。有正本と同じ祖本とされる「蒙

府本」⁽¹²⁾、「戚寧本」と比較してみれば分かるように、第3・10・49回の不一致の箇所がこの三本に皆存しているが、第17回と第38回の不一致が有正本のみに見られる。つまり、第3・10・49回的一致は祖本の戚張本から来たものであり、第17回と第38回の不一致は有正書局の改訂によるものであると言えるだろう。内、「蒙府本」と「戚寧本」の第17回回目は、有正本の総目録と一致していて、「怡紅院迷路探曲折」になっており、第38回回目は、有正本の本文の回目と一致していて「薛蘅蕪諷和螃蟹咏」になっている。したがって、有正本の第17回では総目録の回目が改められずに本文の回目だけが改訂されたのに対して、第38回では総目録の回目だけが改められ、本文の回目は改められなかったと考えられる。

しかし、版本研究があまり進んでいなかった大正時代では、平岡が底本の本来の姿が分からず、日本人の読者を混乱させないために、本文の回目によって不一致の箇所を統一したことは、ある意味で有意義なことではなかろうか。

②底本の誤写が訂正された箇所

有正本の第80回回目「懦弱迎春腸迴九曲 姣怯香菱病入膏肓」においては、「病入膏肓」は明らかに「病入膏肓」の誤写である。『國譯』では「病入膏肓」と訂正されている。

③付載の原文の回目における誤植

第59回回目の原文「噴鶯吃燕」の「吃」は、底本にある「咤」の誤植であると思われる。

第61回回目の原文「寶玉臟情」の「臟情」は、底本にある「情臟」とは漢字の並び順が逆になっており、誤植ではないかと思われる。

このように、『國譯』の回目における底本との相違は、ほぼ底本にある問題点への対処によるもの、或いは誤植によるものである。

(3)『國譯紅樓夢』の回目における訳語及びその他の全訳本との比較

『紅樓夢』は白話文で書かれており、白話小説においても口語性が高く、俗語・方言なども多く使われているので、漢文訓読という従来の漢籍翻訳方法では難しかった。そのためか、森中（2008）で指摘された通り、『國譯』

の訳文は骨格が訓読であるが、ルビで訳語を記し、全体を口語化することによって、書き下し文の持つ原文との対訳性を損なうことなく、一読して意味が分かる訳文を作り上げたのである。回目もほぼそのような方法で翻訳されたが、やはり回目なりの独自の訳し方があるのではなからうか。本節では、『國譯』の回目における訳語を通して、『紅樓夢』の回目が大正時代にどのように解読され、翻訳されたか、その翻訳が現代の松枝訳・伊藤訳・飯塚訳と比べて何かギャップがあるのか、また、後の全訳に対してどんな影響を与えたのかを解明したい。

①対人呼称の翻訳

『紅樓夢』回目には対人呼称が数多くある。それらの対人呼称は『國譯』でどう訳されているかを見るために、『國譯』の回目における対人呼称の訳語を抽出してみた。そして他の全訳本の訳を比較し、その結果を表3にまとめた。

表3－『紅樓夢』回目における対人呼称の翻訳

原文/回数	國譯	松枝初訳	松枝改訳	伊藤初訳	伊藤改訳	飯塚訳
賈夫人/2	か ぶ じん 賈夫人	賈夫人	か 賈夫人	りん 林夫人	か 賈夫人	賈夫人
劉老嫗/6	りゅうらうりゅう 劉老嫗	劉老嫗	* 劉老婆	* 劉姥姥	* 劉姥姥	* 劉老婆
賈公子/8	かこうし 賈公子	×	×	×	×	×
薛小妹/51	せつせうまい 薛小妹	薛小妹	せつ 薛の小妹	薛小妹	せつしょうまい 薛小妹	せつほうきん 薛宝琴
賈母/3	か ぼ 賈母	賈氏の母	史太君	賈後室	賈後室	史太君
内兄/3	ないけい 内兄	内兄	義兄	義兄	義兄	義兄
張太醫/10	ちやうたいい 張太醫	張太醫	張太医	張太医	張太医	張医師
妹妹/34	まいまい 妹妹	妹	妹	妹	妹	妹
哥哥/34	か か 哥哥	兄	兄	兄	兄	兄
胡庸醫/51	こようい 胡庸醫	胡庸醫	藪医胡先生	やぶ 庸医 胡庸医	こ やぶくすし 胡庸医	やぶ こ 藪医者胡先生
史太君/54	し たいくん 史太君	史太君	史太君	史後室	史後室	し たいくん 史太君
金寡婦/10	きん こけ 金寡婦	金寡婦	きん か ぶ 金寡婦	きん こけ 金寡婦	金寡婦	きん 金寡婦

李奶母/8	りばあや 李奶奶	×	×	×	×	×
-------	-------------	---	---	---	---	---

（*は底本にある原語の言い方が有正本と違うことを表す。×は当該の見出し語が未発見のことを表す。「原文」は『國譯』の底本有正本にある原文を指す。）

表3で示されているように、『國譯』の回目では12語の対人呼称の内に10語が音訳されている。内、「賈夫人」「劉老嫗」「賈公子」「薛小妹」は既に日本語として定着した「夫人」「老嫗」「公子」「小妹」の前に姓をつけただけで、特に違和感はない。それに対して、「賈母」「内兄」「張太醫」「妹妹」「哥哥」「胡庸醫」「史太君」は日本語として存在しないにもかかわらず、そのまま音訳されている。その一方で「金寡婦」と「李奶母」の2語は和訳されている。それらを『國譯』以外の全訳本の翻訳に比較して見れば、『國譯』の回目における対人呼称に関する翻訳の特徴が分かってくる。

a. 「賈夫人」

全ての全訳本ではほぼ『國譯』と同じように漢語そのまま音訳されているが、伊藤初訳だけにおいては名字が変えられ、「林夫人」と訳されており、大きく異なっている。「賈夫人」とは、姓を賈といい、名を敏という。林如海の妻、林黛玉の母親、「史太君」の娘である。日本の文化では女性が結婚後に主人側の姓に代わるのが一般的であり、林如海の妻なので、当然「林夫人」であろうと、恐らくそういう日本人の意識が伊藤初訳に働いたのだろう。しかし、そのような筋道で考えていくと、賈政の妻「王夫人」も「賈夫人」になり、賈赦の妻「邢夫人」も「賈夫人」となるので、その二人の「夫人」が区別できなくなってしまう。したがって、「林夫人」という翻訳は、日本文化による翻訳であり、『紅樓夢』原文との間にずれが生じたのではないかと思われる。後の伊藤改訳では「林夫人」が「賈夫人」と改められた。

b. 「劉老嫗」

『國譯』と同底本を用いた松枝初訳だけに見られ、『國譯』と同じように音訳されている。

c. 「賈公子」

底本の違いによって、『國譯』以外の全訳本で当該の見出し語が見られなかった。

d. 「薛小妹」

ほとんど『國譯』と同じように音訳されているが、飯塚訳でははっきりとその人の名前で「薛宝琴」と訳されている。

e. 「賈母」

賈政と賈赦の母親、賈宝玉の祖母である。『國譯』の回目では、本文における「ごいんきよさま」の訳と違って、「かほ」と音訳している。松枝初訳では「賈氏の母」と訳しているが、この「賈氏」は誰のことを指すかは曖昧である。そこで、松枝改訳では「史太君」と改められている。飯塚訳では松枝改訳と同じ訳になっており、伊藤訳では「賈後室」と訳している。

f. 「内兄」

妻の兄のことを指す。松枝初訳だけで『國譯』と同様に音訳しているが、それ以外では「義兄」と和訳している。

g. 「張太醫」

ほぼ『國譯』と同様に音訳されているが、飯塚訳では「張医師」と訳されている。「太醫」は元々中国古代の官職名であるため、音訳されたのも固有名詞として扱われたのだろう。しかし、『紅樓夢』では、「張太醫」は清朝廷の本当の「太醫」ではないので、飯塚氏が読者に誤解させないために「張医師」と和訳したのだろうと考えられる。

h. 「妹妹」・「哥哥」

『國譯』の「まいまい」・「かか」のような音訳の訳し方は現代から見れば大変稀であろうが、漢文訓読で有り得る訳であり、それは漢文訓読からの影響ではないかと思われる。それに対して、その他の全訳では皆「妹」「兄」に訳されている。

i. 「胡庸醫」

松枝初訳だけが『國譯』と同様に音訳しており、それ以外の全訳本では皆「藪

医」と訳している。それは日本人にとって「庸醫」の意味が難解であるからだろう。

j. 「金寡婦」

『國譯』では「寡婦」を「ごけ」と和訳しており、伊藤初訳でも『國譯』と同様に和訳しているが、その他の全訳本では皆音訳法を取っている。音読みの「寡婦」も日本語として定着しているため、音訳でも別に違和感が感じられない。

k. 「李奶母」

底本の違いによって『國譯』以外の全訳本では当該の見出し語は見られなかった。『國譯』では、原文の「李奶母」が「李奶奶」になっており、「りばあや」と訳されているが、それはどういうことだろう。中国語では、「奶母」とは「乳母」のことを指し、「奶媽」「奶娘」「嬭嬭」とも言う。「奶奶」は『大漢和辞典』の説明⁽¹³⁾によると、「①しもべが年若い主婦を稱する辭。②婦人に対する敬稱。③孫から祖母を呼ぶ稱。④兄の妻の稱」という四つの意味を持つが、『紅樓夢』における「奶奶」の使い方としては主に①②が該当する。『紅樓夢』では、「李奶母」も「李嬭嬭」も「李奶奶」も全て賈宝玉の乳母のことを指すが、「奶母」と「嬭嬭」は別に敬称の意味を含まないで、ただ乳母という職業を表す呼称であるのに引きかえ、「奶奶」は敬称であり、主に身分の低い「丫環」が賈宝玉の乳母を敬って稱する場合に使われている。つまり、「李奶母」と「李嬭嬭」は特に話し手の身分の制限がないが、「李奶奶」は身分の低い使用人という話者の身分の制限がある。したがって、回目で平岡氏が「李奶母」を「李奶奶」に直しているのはやや違和感が感じられる。勿論、「りばあや」というルビの訳は別に問題がない。

以上述べたように、『國譯』の回目における対人呼称に対する音訳の多用は『國譯』の一つの特色であると言えよう。そして、松枝初訳では見られなかった「賈公子」と「李奶母」という2語の他に、残った10語の見出し語の内、7語の訳語が『國譯』と同様に音訳されており、それは松枝初訳が『國譯』から受けた影響の現れにもつながっているとと言える。それに対して、そ

他の全訳本では、既に日本語として定着した呼称だけは音訳し、日本語として成立できない呼称はなるべく和訳しようというような方針で翻訳作業を進められたのではないかと考えられる。

②「単漢字形容詞＋呼称」の場合

『紅樓夢』の回目においては単漢字形容詞が呼称の修飾語として使われる場合も多数あり、『國譯』ではほぼ単漢字形容詞を中心語の呼称と共に全体的に名詞句として扱い、音訳している。その語例を統計してみると表4になる。

表4－「単漢字形容詞＋呼称」の場合の翻訳

原文/回数	国訳	松枝初訳	松枝改訳	伊藤初訳	伊藤改訳	飯塚訳
賢襲人/21	賢 <small>けん</small> 襲人 <small>しゆじん</small>	賢 <small>けん</small> き襲人 <small>しゆじん</small>	賢 <small>けん</small> き襲人 <small>しゆじん</small>	賢襲人	賢明の襲人	賢い襲人
俏平兒/21	俏 <small>せう</small> 平兒 <small>へいじ</small>	俏 <small>かほよ</small> き平兒 <small>へいじ</small>	俏 <small>かほよ</small> き平兒 <small>へいじ</small>	俏平兒	機転の平兒	粋な平兒
俏平兒/52	同上	俏平兒	意 <small>いき</small> 気 <small>へいじ</small> な平兒	同上	心 <small>へいじ</small> きく平兒	機転の平兒
醉金剛/24	醉 <small>すい</small> 金剛 <small>こんごう</small>	醉金剛	醉金剛	醉金剛	醉金剛	醉漢 <small>げいじ</small> 倪二
痴女兒/24	痴 <small>ち</small> 女 <small>ぢよ</small> 兒 <small>じ</small>	癡 <small>ち</small> 女 <small>ぢよ</small> 兒 <small>じ</small>	癡 <small>ち</small> 女 <small>ぢよ</small> 兒 <small>じ</small>	癡 <small>ち</small> 女 <small>ぢよ</small> 兒 <small>じ</small>	癡 <small>ち</small> 女 <small>ぢよ</small> 兒 <small>じ</small>	小女 <small>しょうごう</small> 小紅
猊霸王/47	猊 <small>がい</small> 霸王 <small>はわう</small>	猊霸王	猊霸王	猊霸王	猊霸王	馬鹿 <small>ばか</small> 鹿 <small>か</small> 若殿
冷郎君/47	冷 <small>れい</small> 郎君 <small>らうくん</small>	冷郎君	冷郎君	冷郎君	冷郎君	冷血な男
勇晴雯/52	勇 <small>ゆう</small> 晴 <small>せい</small> 雯 <small>ぶん</small>	勇晴雯	健 <small>けなげ</small> 気 <small>せいぶん</small> な晴雯	勇晴雯	勇める晴雯	強 <small>せいぶん</small> 気 <small>ぶん</small> な晴雯
敏探春/56	敏 <small>びん</small> 探 <small>たん</small> 春 <small>しゆん</small>	敏探春	探春の敏腕	敏 <small>き</small> 腕 <small>けもの</small> 家探春	敏腕 <small>き</small> 家探春	俊敏探春
識寶釵/56	識 <small>しき</small> 寶 <small>ほう</small> 釵 <small>さき</small>	識寶釵	宝釵の識見	智 <small>ち</small> 慧 <small>えしや</small> 者寶釵	知 <small>ち</small> 恵 <small>えしや</small> 者寶釵	賢良寶釵
慧紫鵲/57	慧 <small>けい</small> 紫 <small>し</small> 鵲 <small>けん</small>	慧紫鵲	聡慧なる紫鵲	慧 <small>きと</small> き紫鵲	慧 <small>きと</small> き紫鵲	聡明な紫鵲
慈姨母/57	慈 <small>じ</small> 姨 <small>い</small> 母 <small>ぼ</small>	慈姨母	情け深き叔母	や <small>やさし</small> お <small>お</small> ば <small>ば</small> 媽 <small>ま</small>	や <small>やさし</small> お <small>お</small> ば <small>ば</small> 媽 <small>ま</small>	慈愛の叔母
憨湘雲/62	憨 <small>かん</small> 湘 <small>しやう</small> 雲 <small>うん</small>	憨湘雲	憨湘雲	憨湘雲	憨湘雲	のんびり湘雲
猊香菱/62	猊 <small>がい</small> 香 <small>かう</small> 菱 <small>りやう</small>	猊香菱	猊香菱	猊香菱	猊香菱	ぼんやり香菱
情小妹/66	情 <small>じやう</small> 小 <small>せう</small> 妹 <small>まい</small>	情小妹	情小妹	情小妹	情小妹	有情の妹
冷二郎/66	冷 <small>れい</small> 二 <small>に</small> 郎 <small>らう</small>	冷二郎	冷二郎	冷二郎	冷二郎	無情の男
苦尤娘/68	苦 <small>く</small> 尤 <small>いう</small> 娘 <small>ぢやう</small>	苦尤娘	苦尤娘	あわれ尤娘	あわれ尤娘	尤氏

酸鳳姐/68	さんほうそ 酸鳳姐	酸鳳姐	さん 酸鳳姐	むごき熙鳳	むごき熙鳳	きほうしつと 熙鳳嫉妬 に狂って
癡公子/78	ちこうし 癡公子	癡公子	癡公子	癡公子	ち 癡公子	痴公子
老学士/78	らうがくし 老學士	老學子	老學究	老學士	老學士	老學士
癡丫頭/73	ばかぢやう 癡丫頭	癡丫頭	ばか姐や	癡丫頭	ちあとう 癡丫頭	ばか 馬鹿な女中
儒小姐/73	くづぢやう 儒小姐	儒小姐	気弱な令嬢	儒小姐	だしょうしや 儒小姐	気弱な令嬢
俏丫環/77	りこうぢやう 俏な丫環	俏丫環	やさ 俏しき腰元	俏侍女	みめ 俏よき侍女	美人女中
美優伶/77	きれい やくしや 美な優伶	美優伶	美しき優伶	美優伶	美しき優伶	少女役者

表4を見ると分かるように、24語の見出し語の内、『國譯』で音訳しているのは20語もあり、和訳しているのは「癡丫頭」「儒小姐」「俏丫環」「美優伶」の4語のみある。『國譯』の影響を受けたか、松枝初訳と伊藤初訳においてもほとんど音訳している。内、松枝初訳では第21回の「賢襲人」と「俏平兒」以外の22語が全て音訳されており、『國譯』の訳語と重なっているのは18語もある。伊藤初訳の中で音訳しているのは18語であり、内、14語が『國譯』の訳語と重なっている。『國譯』で和訳している4語も松枝初訳と伊藤初訳ではそのまま音訳しているが、松枝改訳と伊藤改訳ではなるべく和訳しようとした。それは「丫頭」「小姐」「丫環」「優伶」は日本語にない漢語であるため、そのまま音訳されると現代の一般の日本人の読者にとっては理解し難いからだろうと考えられる。しかし、松枝改訳では「美優伶」が「美しき優伶」と改められているだけで、「優伶」の音訳がそのまま残っている。伊藤改訳でも「癡丫頭」と「儒小姐」の音訳が改めずに残っている。

したがって、松枝改訳と伊藤改訳では、『國譯』の影響から脱出するためか、なるべく和訳しようとしたが、「単漢字形容詞＋呼称」の音訳語彙数は松枝改訳では9語、伊藤改訳では12語がまだ残っている。それに対して、飯塚訳では松枝訳と伊藤訳とは異なり、「痴公子」と「老學士」以外は皆和訳している。

「単漢字形容詞＋呼称」の場合の翻訳を通して、『國譯』が松枝訳と伊藤訳

に何らかの影響を与えたと言えよう。特に松枝初訳と伊藤初訳への影響が大きかったのではないと思われる。

③『國譯紅樓夢』の回目における呼称以外の漢語の和訳

『國譯』の回目においては、音訳語が大多数であり、目立っているが、和訳している漢語も少ないながらも22語存在している。これらの漢語の『國譯』における和訳語を他の全訳本の訳語と比較してみたところ、表5で示している通り、ほとんどは他の全訳本の訳語と近似しているが、『國譯』の独特な和訳語もあることが分かった。例えば、「通靈」「閨秀」「天遊黄泉路」「軟語」「燈謎」などがその例として挙げられる。

表5－『國譯』回目における呼称以外の漢語の和訳及び其の他全訳本での翻訳

原文/回数	國譯	松枝初訳	松枝改訳	伊藤初訳	伊藤改訳	飯塚訳
通靈/1	ふしぎ 通靈	通靈玉	通靈玉	通靈玉	くす 奇しき玉	美玉
閨秀/1	つま 閨秀	閨秀	佳人	佳人	たな 妙なる女	美人
風塵/1	うきよ 風塵	風塵	浮世	浮世	浮世	この世
仙逝/2	なくなら 仙逝れ	みまかり	逝去し	身まかる	身まかる	せい 逝去し
頑童/9	わんぼくもの 頑童	頑童	頑童	わんぼく 頑童	わんぼく 頑童	がんどう 頑童
壽辰/11	たんじやう 壽辰	誕生祝の宴	誕生祝の宴	寿辰	じゆしん 寿辰	誕生祝い
家宴/11	ないえん 家宴	誕生祝の宴	誕生祝の宴	家宴	家宴	宴
毒設/12	たくら 毒設み	毒計を設け	毒計を ^{めぐ} 回らし	計を設くる	計を設くる	はかり 計を回らし
協理/13	しまつ 協理す	協理す	家政を執る	家務を執る	取りしまる	家事を 援助する
捐館/14	みまか 捐館り	みまかり	身まかり	身まかる	みまかる	霊返り
才選/16	おゆたて 才選になり	尚書に選 ばれ	才を以て 召され	才を以て 召さるる	才を以て 召さるる	召され
天遊黄泉路 /16	はやくわかじに 黄泉路天遊 す	天逝して 黄泉に遊ぶ	わかじに 天死して 黄泉路に ふみ入る	若くして 黄泉路を 辿りゆく	若くして 黄泉路を 辿りゆく	若くして 黄泉路の 客となる
軟語/21	うま 軟語く	軟語	軟語	軟語	軟語	やさしく

曲文/22	うた 曲文	曲文	きょくぶん 曲文	きょくぶん 曲文	きょくぶん 曲文	芝居の歌
燈謎/22	なぞあんどん 燈謎	燈謎	とうべい 燈謎	とうべい 燈謎	とうべい 燈謎	なぞ 謎解きの話
魁奪/38	かうみやう 魁奪し	魁奪し	きやくを 奪い	魁奪する	きやくを 魁奪する	首席を奪い
諷和/38	よ 諷和む	諷和す	和して諷す	諷和する	あてこすり 諷和 する	和して 諷刺する
牙牌令/40	すこうりく 牙牌令	牙牌の令	かると 牙牌の令	牙牌令	がはいれい 牙牌令	しゅれい 酒令
尴尬/46	ふせい 尴尬	歪れる	まが 歪れる	尴尬	うるん 尴尬	異常
閨閣/49	ふじん 閨閣	閨閣	×	×	×	×
蝦鬚鐺/52	うでわ 蝦鬚鐺	うでわ 蝦鬚鐺	かしゆたく 蝦鬚鐺	かしゆたく 蝦鬚鐺	かしゆたく 蝦鬚鐺	かしゆ 蝦鬚の腕輪
杜撰/78	つく 杜撰る	杜撰す	でつ 捏ち上ぐ	撰する	撰する	撰す

a. 「通靈」

第1回目目前句「甄士隱夢幻識通靈」の「通靈」は、『紅樓夢語言詞典』⁽¹⁴⁾の説明によると、甄士隱が夢の中で見た「通靈寶玉」の略称であるという。「識通靈」は、松枝訳と伊藤初訳では「通靈玉をしる」、伊藤改訳では「奇しき玉を見しる」、飯塚訳では「美玉を見る」と訳され、直接に「通靈」は「玉」そのものを指すと解釈している。それに対して、『國譯』においては「ふしぎをさとり」と訳している。確かに甄士隱が夢の中で聞いた僧と道人の話も不思議であり、夢の中で見た通靈寶玉と彫りつけてある美玉も不思議であり、とにかく不思議な夢であるため、「ふしぎ」と訳されたのかもしれない。

b. 「閨秀」

「閨秀」は古代女子に対する美称であり、多く未婚の女性を指す。第1回目後句「賈雨村風塵懷閨秀」における「閨秀」はここで甄家の「姣杏」という女中のことを言う。松枝初訳ではそのまま「閨秀」と音訳されているが、後の改訳では伊藤初訳のように「佳人」と改められている。伊藤改訳ではまた「妙なる女（たえなるひと）」と改められた。『國譯』ではそれらの全訳本と違って、「閨秀」の漢字に「つま」というルビがついている。『日本国語大辞典』⁽¹⁵⁾の説明によると、「つま」は夫婦、恋人が互いに相手と呼ぶ称であ

るといふ。平岡氏は「配偶者の女性」の意味でなく、「恋人の女性」の意味として「つま」というルビをつけた筈である。つまり、甄家のその女中は賈雨村にとって恋人であると平岡が考えたに違いない。飯塚訳の「美人を見初む」というように、「賈雨村風塵懷閨秀」とは、賈雨村が甄家の女中に一目ぼれし、その女中が二度も彼を振り返って見たので、彼女も自分に気があり、浮世の中の自分の知己であると賈雨村が思っていて、いつも彼女の心を心に留めていたという話である。そういう意味でその女中は賈雨村にとって恋しい人、恋人と言っても良いだろう。したがって、平岡氏の「つま」という訳は、賈雨村にとってのその「佳人」の存在までも訳出しているのではないかと思われる。

c. 「天遊黄泉路」

若くして亡くなるという意味として訳されているのは各全訳本に共通している。しかし、『國譯』における「はやくわかにす」という訳し方については、元々「わかに」には「はやく」という意味合いが含まれているにもかかわらず、平岡がわざわざ「はやく」と訳出しているのである。この表現の仕方は他の翻訳とは異なる特別な訳である。

d. 「軟語」

松枝訳と伊藤訳の音訳と違って、『國譯』では「うまく」と和訳されている。それは「軟語」を「なんご」と音読みしても、日本人の読者にはやはりその意味が分かりにくいだろうと平岡が考え、第21回の内容を理解した上で意識を行ったのだろうと推測される。その影響を受けたか、飯塚訳では「やさしく」と意訳が行われている。

e. 「燈謎」

「燈謎」とは、行燈に貼る謎解きの語である。松枝訳と伊藤訳の音訳に対して、『國譯』と飯塚訳では和訳されている。飯塚訳では、「謎解きの語」という「燈謎」そのものの本質が訳されているが、「あんどん」との関係についての説明が欠けている。それに対して、『國譯』の「なぞあんどん」という訳語は最も原文の意味に近似し、独自性のある創造的な表現ではないかと

思われる。これも、平岡が「燈謎」という中国の伝統的文化をうまく理解した裏付けになるだろう。

上述したような『國譯』の独自の訳語の他に、後世の全訳本に近似している訳語も多々ある。そこからも、後世の全訳本が『國譯』から何らかの影響を受けたと言えるだろう。そして、大正時代の『國譯』の訳者が代表する日本人の漢学者が持つ、高い白話語彙の読解力も分かっただろう。

3. 終わりに

本稿では、主に『紅樓夢』回目の翻訳に焦点を置き、各全訳本の底本及び『紅樓夢』前80回回目上の相違について検討した。また、日本最初の全訳本の『國譯紅樓夢』を中心に、改訳も入れて合計6種類の全訳本の回目を比較してきた。

その結果、『紅樓夢』回目における呼称に対して、ほとんどの全訳本は『國譯』と同様に音訳が多く施され、そこからは日本最初の全訳本である『國譯』の後世への影響力を窺うことができ、その中でも特に松枝初訳への影響が大きかったことがわかった。また、『國譯』における独自の和訳語が何か所あることも考察できた。それらの独特な訳語は、正に訳者の平岡が原文の意味と文化をうまく理解できたことの証拠になるのではないかと考えられる。つまり、本稿の考察を通して、大正時代の『國譯』の訳者平岡の優れた漢才と高い白話語彙に対する読解力が分かった。日本初の全訳本としての『國譯』は後世の全訳本に大きな影響を与え、日本における『紅樓夢』の流布や受容の促進に、更に中日文化交流の発展に大いに寄与できたのではないかと思われる。

勿論、中日文化交流の一環としての『紅樓夢』の受容を考察するには、回目の翻訳のみでは不十分であり、『紅樓夢』という作品全体の翻訳を考察しなければならない。それを今後の課題としたい。

注：

(1) 曹雪芹（1724？～1764？）、姓を曹、名を霑、字を芹圃といい、雪芹、芹溪居士、

夢阮と号した。漢軍正白旗。晩年北京で『紅樓夢』の執筆に注いだか、未完のまま病没した。

- (2) 高鶚 (1738? ~ 1815)、姓を高、名を鶚、字を蘭墅といい、紅樓外史と号した。漢軍鑲黃旗。乾隆60年進士。
- (3) 伊藤漱平「日本における『紅樓夢』の流行—幕府から現代までの書誌的素描」『中国文学の比較文学的研究』古田敬一編 汲古書院 1986.3 p453
- (4) 孫玉明『日本紅学史稿』北京図書館出版社 2006.11
- (5) 同上。
- (6) 森中美樹『『紅樓夢』と幸田露伴』『アジア遊学』(105) 勉城出版2007.12
- (7) 森中美樹「平岡龍城書入本と『国訳紅樓夢』(上)」『中国学研究論集』(21) 広島中国文学会編2008.12
- (8) 晁繼周『『紅樓夢辞典』編纂旨義浅述』『紅樓夢辞典』周汝昌主編 広東人民出版社 1987.12
- (9) 森中(2008)によると、平岡龍城(生卒不詳)は大正・昭和初期に活躍した在野の研究者であり、著書に『標註訓譯水滸伝』(1914~1916年)、『精註雅俗故事読本』(1918年)、『國譯紅樓夢』(1920~1922年)、『日華大辞典』(1936~1938年)がある。
- (10) 乾隆年間戚蓼生に所蔵され、序文が書かれた所から、「戚蓼生本」「戚序本」とも呼ばれる。現存する戚序本は4種ある。①張開模氏原蔵本。1921年に焼失したと疑われたが、1975年冬、上海古籍書店で前40回が発見され、現在上海図書館に収蔵されており、「戚滬本」「戚張本」とも呼ばれる。②有正本大字本。1912年に有正書局が張開模氏原蔵本によって石印したもの。③有正小字本。1920年に有正大字本によって縮印されたもの。④南京図書館蔵本。張開模氏原蔵本によって影抄されたものとされる「戚寧本」「南図本」とも呼ばれる。2010年に初めて中国国家図書館出版社に影印出版された。ここで松枝氏が言っている「戚蓼生本」は有正本である可能性が大きい。
- (11) 即張開模氏原蔵本。詳しくは注10を参照。
- (12) 写本であり、全120回ある。前80回の祖本は戚本と同じで、程偉元の序文と57~62回、及び後40回は後から補書されたものであるとされる。第71回末総評の後に「柒翁王爺」と書いてあることから、清の某王府の所蔵だったという説がある。清の蒙古王府から購入されたものなので、「蒙古王府本」・「蒙府本」・「王府本」とも呼ばれる。現在は中国国家図書館に所蔵されている。
- (13) 諸橋轍次『大漢和辞典』(縮寫版) 卷三 大修館書店 昭和51年p2900
- (14) 周一主編『紅樓夢語言詞典』商務印書館1995.11 p859
- (15) 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』小学館1972.12-1976.3